



庭づくりと創作活動で 人生を楽しむ

桑迫賢太郎さん



もう一度、会いたい



かつて雪浦で自給自足の生活を目指しながら絵を描いて生活していた桑迫賢太郎さんに会うため、雲仙市へと足を運んだ。柔らかな佇まいが十四年前とあまりにも変わらなくて、一瞬にして心の距離が縮まったような気がした。

桑迫さんは、妻の里枝さんの出身地である島原半島へ九年前に移住し、今は庭仕事と創作を中心とした暮らしをしているという。さっそく自宅の奥に案内してもらおうと、そこには公園と呼んだ方がふさわしい規模の庭が広がっていた。しかも、数えきれないほどの植物が自由奔放に伸び、色とりどりの花々が、まるでこの世界を謳歌しているように咲き誇っている。

「僕たちがこの家に引っ越してきたのは九年前の春でした。その前の冬に、ここに住んでいらつしゃった大家さんのお母様が亡くなり、空き家になっていたんです。当時、この庭はよく手入れされた畑で、僕たちが来た時も、キャベツや玉ネギ、空豆などがなっていて、とても大切にされていたことが分かりました。この土地を畑として受け継ぐ選択肢もあったかもしれま

せんが、雪浦で畑仕事をしていた際、なかなか収穫に結びつかず、農業に対して劣等感を抱いていた僕は、この広い土地で野菜を栽培する自信がありませんでした。しかし夏になり、どんどん荒れていく畑を見るにつけ胸が痛み、少しずつ手を入れるようになりました」。

庭に出るうちに、桑迫さんはあることに気付いた。それは、庭仕事は収穫を問わない、ということだ。思い返せば、雪浦時代も農作業は好きだった。植物と関わることは自体は好きなのだ。「畑より、庭の方が自分には向いている」。それは大きな発見だった。

桑迫さんの庭づくりは、なるべく自然に近い環境で植物を育てることを基本としている。決して整地したり、耕したりせず、もともと自生していた植物のまわりに気に入った苗や種を植えていく。「庭仕事はだいたい道具を使わずに手で行います。刃物を使うと、その植物にとって必要な、芯が通った枝や茎まで切ってしまうから。優しい力で抜けなかつたら、それはこの環境にとって必要な枝や茎なのだと思います」。



里枝さんが手作りのおはぎでもてなしてくれた。温かな気遣いが嬉しい。



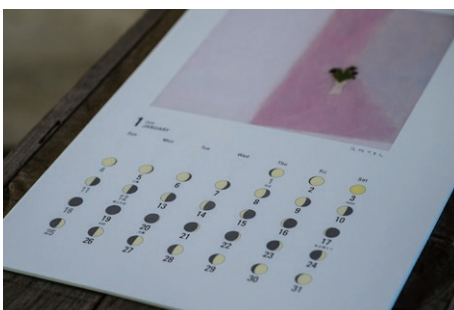
野菜を干したり、春に向けての苗を準備をしたり…
敷地内のいたるところで、桑迫さんご夫妻の豊かな暮らしが垣間見える。



庭をモチーフにした抽象画。
柔らかな色づかいが桑迫さんらしい。



ラシバという名前で、水路に植わっていたのを持って帰って植えました」。聞いてみると、桑迫さんには雑草という概念がないようだ。生命のすべてが愛おしいのだろう。小さな花に触れながら「ありがとうございます」と、咲いてくれたことへの感謝の気持ちをつぶやいている。「植物の良さは、勝手に生きていつてくれるところ」だと言うが、充分過ぎるほどの愛情は伝わっているのだと思う。そうでなければ、彼らがこんなにも嬉しそうに咲くはずはない。



毎年、書下ろしのみで制作するカレンダー



庭

づくりは描く絵にも影響を与えていた。「植物の絵を描くようになったのは、大きな変化ですね」。ギャラリーにはバラやミモザ、スイセンや夾竹桃などの素描のほか、庭をイメージして描かれた抽象画も飾られている。どれも桑迫さんらしい優しい色づかいで、心温まる穏やかな世界が広がっている。

庭づくりと絵を描くことには、共通点もあるようだ。「僕は草取りが好きなんです。ちよつと混みあっているところの草を間引くだけで風が通り、バランスが良くなります。庭も絵もバランスをとるという点が同じで、僕はそれがとても好きなのだと思います」。

アトリエまで花を持ち帰り、描くこともある。「植物は同じ科名のものだと似ているため、描くのが難しいと感じることもあります。僕は絵が上手くないので(笑)、どうしたらその植物らしさを色や線で抽出できるか、エッセンスをどう汲み取ればいいのか、そうしたことを考えながら手を動かしています」。

雪浦で農作業をしていた頃は、忙しそうにしていた桑迫さんだが、ここではのんびりとした時間を過ごしていることが伝わってくる。自宅とギャラリーと庭。そこには、この空間だけで日々が満たされているような、のどかで和やかな人生があった。桑迫さんはわが子のように植物を愛でながら、庭を歩く。「この子はメドーセージ、この子は芙蓉です」。「この子はカッシア。いま満開です。可愛いでしょ」。「この子はチカ

もう一度、会いたい

桑迫賢太郎 さん



植物をモチーフにした素描。
桑迫さんの目や手を通すと、バラ(上)やミモザ(左)は、また違った印象を与えてくれる。

